

稀 人

第四稿

脚本／小中千昭

Screen Play by Chiaki J. Konaka

2004\04\14

登場人物

増岡拓喜司(38)……………畏視者

F……………稀人の少女

黒木 阿礼(54)……………賢者

毛布の男(42)……………地下生活者

福本 綾(36)……………増岡の元妻

森(40)……………映像制作会社部長

ENGディレクター

報道番組レポーター

子ども服ブティック店員

携帯ショップ店員

飯塚 国美(17)……………殺される女子高生

増岡を殴る男

MIB……………黒づくめの男

デロ……………瘦身／四つ這いで歩く侏儒

地下道の警官数名
他社ENGクルー

前書

これは、「恐怖」についての物語映像、即ちは映画である。恐怖とは、伝播する情報である、とここでは規定する。観客に恐怖を伝播さすには、まず物語自体が恐怖していなければならない。演技者も、そしてカメラの背後にいる側も。その恐怖する対象は、一つの種類に既定されるものではない。ここに書かれた映像物語は、観客、そして製作者が個々に持ち得る恐怖の対象を喚起せしめる装置、として機能させる意図がある。

物語開幕当初は、増岡という男の意識的、無意識的に撮影したビデオ映像のみで構成される。これは、この映像物語が疑似ドキュメンタリ映画だという架空の枠組を提示する意図ではなく、あくまでもリアリティという、恐怖を発生させる第一義的なシステムに、原理的に従う為のものである。

それを明示する為に、シーン柱に「V／」という記号を配し、それが増岡が撮影する（意識的／無意識的にせよ）映像だという事を表した。物語開巻当初のそれは、徹底する事が必要であるが、物語が増岡の意識、認識が錯綜し始めるに伴ない、その「V／」という記号に従う必要は無くなっていくかもしれない。

同様に、物語の話者である増岡のモノローグは、紛れもなく彼自身の認識、少なくとも彼の意識の中で発生している事柄を、意図的な虚偽をしている場合を除き述べているが、実際の映像に於いて、彼が述べているままのものが記録されているとは限らないだろう。

既にして、意図した混乱をこの物語はしている。しかし監督による時間操作、即ち編集という作業を経た後、更に異なるものへ変態を遂げる筈である。

○V／画面一杯に映る増岡の顔

暗き空間内。低い風の音がこもって聞こえる。
小さなLEDが、増岡の顔を照らしている。
閉じられた唇周りは、無造作に拭われた血の跡。
レンズを見つめる増岡の表情は――

○V／低層ビル／非常階段／午後

非常階段を上がっていく視点。
都心部の中・低層ビルが密集するエリアにあるビル。
やがてカメラは屋上へと辿り着く。
カメラは三脚に据えられ、手すりの向こうに背を向
けているビルの、とある窓にレンズが向けられる。
窓は、内側からベニヤで覆われ目隠しされている。
レンズはそこにズームする。
ベニヤには、びっしりと文字や意味不明の記号が書
き付けられている。
「助けてください」「警察に連絡してください！」
「私は監禁されています」
と、ベニヤの一部には黒くぽっかりと穴が開けられ
ていた――。
そこにズームしていく視点。
漆黒の中に、何かがあるのか……。

○V／下町住宅街

木造の古い家が並ぶ路地。そこを進む撮影者。
と――、空き家となっている家の二階を見上げる。
曇り切ったガラスの窓。
内側に、何者かがいるのか――。

○V／増岡の部屋

天井近くに据えられた固定カメラの映像。

部屋の中央に、DTV環境の整ったデスクがあり、それを囲む様に多くの液晶ディスプレイが虚空に浮かぶ窓の如く立っている。

閉じきられた窓の下にベッド。

増岡はデスク前に座り、DVテープをデッキに挿入。キーボードで操作を始める。

窓と反対側の壁には、スチール・フレームに据えられた、無数のハードディスク。ファンとシーク音だけが聞こえる。

サプリメントの瓶からタブレットをザラザラと出して、水と共に喉に押し込む増岡。

モニタにあのベニアで塞がれた部屋の映像が映る。開けられた穴——。その奥に、何か蠢くのが見える。こちら側を覗き見ている者の目、なのか——。

○V／公園／夜

男を見上げるアングルでベンチに置かれるカメラ。

増岡「(レンズには時々目をやるだけ)——多分……、あの窓の内側にいるのは……、薬物中毒患者じゃないかと思う。あの部屋の中で一人で、彼、いや彼女なのかもしれないが……、どんな妄想の中で生きているのか、正直に言うて知りたいとも思わない——。ただ——、私はあの小さな穴にレンズを向けて、見つめる事によって、内側にいる者を救ったのだと思う——」

○V／液晶モニタ再撮画面(増岡の部屋)

「独占スクープ映像」のテロップが右肩に。
地下道の映像。警官がカメラを制する。

画面内警官「下がって——」
下がって——
下がって——
その制止を振り切り、突入していくカメラ。
ブレながらもグッとズームイン。

警官や駅員に包囲された中年の男。その顔はDVEによってボカされており、まるでのっぺらぼうだ。手には細身の果物ナイフが握られている。

男は しきりに顔を左右に振っている。何かを見探している様に。

駅員「それをこっちに渡しなさい！」

と！ 男はナイフの刃先を己の目に突きたて——
ぐっ、とそれにズームインしたところで、フリーズ。

今の映像を映していたモニタとは別のモニタ。そこには白素材の同場面が映っている。

ナイフを持つ男の顔にはボカシが入ってない。

その表情を捉えると——

男は脅えている。恐怖している顔。

彼が見回しているのは、彼を捉えようとしている人間ではないらしい。

増岡「(モノ)黒木阿礼という、今の私と同じく失業者だった

この男は、この時何にこれほどまでに脅えていたのか。

ナイフで己の目を貫いたのは、その恐怖から逃れる為だったのか……」

やがて、ある一点を見据えた時、男の恐怖は絶頂に達した。

駅員「それをこっちに渡しなさい！」

激しくブレながらズームインするカメラ。男の眼窩に深く入り込む刃先は、頭蓋の内側をも切り裂いたであろう。と、そこでフリーズ。

隣のモニタの、顔にボカシがかけられた男の姿。

どちらにリアリティがあるのか——。

やや巻き戻された、白素材映像。

恐怖の絶頂にある男の表情を静止画表示。

——溶暗

増岡「(モノ)彼が、この時に見たものを、私は見たかった」

外付けファンで冷却されているハード・ディスク群。そこに収められている、数TBにも及ぶ圧縮された映像――。

増岡「(モノ) これまでに撮った映像の中には、例えば心霊写真の様なもの、UFOかもしれない、空に浮かぶ何か、そういった不確かなものが映り込んでいるものもある。だが、それらは私にとって無価値だ。そこに映っているものは、既にして人に不可解なものであるという概念が与えられているものだからだろう。こういった映像を見た人間がその時に感じる恐怖――。それは、あの純粹なる恐怖の表情に遠く及ばない」

○V／スナッフビデオ

劣悪なクオリティの圧縮映像。

地下の密室。目だけを露出させ、顔面をゴムで覆われている女が椅子に拘束されている。

増岡「(モノ) もしこれが仮に、本当に人が死ぬ瞬間を写し出した映像だったとしても、ここに映っている、恐怖の表情は、不完全なものだと思う」

ゴムで覆われた口を大きく開け、断末魔を上げる女。血走った眼球が突出せんばかりに浮かび上がり――

増岡「(モノ) 己の肉体と精神が他者によって消失させられることへの恐怖こそ、本当の恐怖なのだというなら、私は殺人鬼の真似事をしてまで、その恐怖の表情を私の網膜と、そしてデジタルデータへ記憶させるだろう」

量子化ノイズにまみれ判然としないながら、女の肉体は損壊させられているらしい。

○歩道橋上(夜)

フェンスが低い古い歩道橋の上にいる増岡。

増岡は、フェンスに脚をかけて登り、下を覗く。

車のヘッドライトの光が眼下に流れていく。
片足を浮かせる増岡。
もう少し脚を上げてバランスを崩せば、彼の肉体は
アスファルトに叩きつけられ、その上を容赦無く車
が踏み潰していくに違いない。

欄干に置かれていたビデオカメラの映像。

増岡、身を乗り出し下を覗き込んでいる。

もう少し、重心をずらせば、彼の肉体は転落する。

増岡、レンズを見る。

増岡「(モノ)そこに映っている私の顔に、恐怖などなかった。
最初から、それは判っていた事だった——」

○V／増岡の部屋

窓の様に立っていた複数の液晶ディスプレイが、今は椅子に座る増岡の顔面を覆い隠す様に接近して設置されている。

鏡地獄の様な中にいる増岡は、低い唸りを上げているハードディスクが次々と吐き出していく映像データを、眼球運動だけで追っていく。

▼増岡のPOV

およそ有為とは思えない映像が、様々な速度に時間を変えられて再現されている。

もう何時間もじっと増岡はその映像の奔流の中で、ただ受容のみを続けている。

と——、あのベニアに覆われた窓の映像になる。
空いた漆黒の穴に向かって視点は接近していく。

増岡「——(凝視する目)」

穴の中に、ほんの僅かに浮かび上がる、顔。

穴の大きさは不釣り合いなまでに小さな、顔。

抽象化されており、大人とも子どもとも、男とも女ともつかぬ、顔——。

増岡「——(凝視する目)」

次に、旧家の路地の映像へ。

二階の曇った窓——。あの時には、見えなかったものが、その内側に——。

増岡「——（凝視する目／僅かに反応）」

窓の内側に立ち、虚空を凝視している女の顔。

その表情は——、恐怖だ。恐怖に身じろぎせず、ただ凝視するしかないという表情。

増岡「——（凝視する目／歪む顔／オフ／絞り出す様な声）」

何を——何を見ているんだ……」

地下道の映像だ。

ボカシ加工されたものと、オリジナルとが交錯。

警官の声「（くぐもっている）下がって——ッ！」

ナイフを手に、恐怖している黒木。

増岡「（凝視する目／オフ）何を——何を見てそれほどまでに

恐怖しているのだ……！」

閃光

増岡の双眸を囲む「窓」の中が、暴走している。

像は歪み、時間が捻じ曲がった再生となり、激しい明暗を伴い、断片的なフラッシュ——時間を1/60に切り取った静止画が現れては消える。

その静止画像群の中に、奇怪なものがある。

闇の中に潜む、四つ足で歩く侏儒——。

増岡の両眼は、あまりにも激しい視覚情報の奔流に堪えきれなくなりつつある。

しかし——、彼は見続けねばならなかった。

血に覆われる以前の、黒木の顔——。

その視線の先を、増岡は見たいと懇願した。

その願いは叶う。

黒木が見つめる先——、そこには小さな扉があった。ほんの少し開かれた隙間から、漆黒の闇が広がっている。

増岡「——（オフ）地下深きところ……」

——溶暗

○街

通りの塵箱に打ち棄てられるサプリメントの瓶。

増岡「（モノ）惰性でのみ続けていた、セロトニンを誘発する薬剤の摂取を私は止めた。真の恐怖という境地に至らねば、私は自分が見たいと願うものに出会えないのだと覚ったからだ」

歩く増岡。

増岡「（モノ）彼らは、△それ▽を見たから恐怖したのではない。△それ▽を見る事が出来たのだ。何という錯誤をしていたのだろう——」

増岡は、地下鉄の入り口へ。

○地下道へ下る階段

下っていく増岡。

増岡「（モノ）あの日、私を含むドキュメンタリーのスタッフは、汚職事件の取材でこの近くのビルに来ていたのだ。既にこの階段には人だかりがしていた」

○地下道

あのスクープ映像が撮られたところと同じ場所に、増岡は再び立っている。

今彼が持っているカメラは、小型の民生機だが。

ファイнда越しに、あの時の自分の動きをトレース。

▼フラッシュ交錯／事件の映像

カメラから顔を離し、かつて黒木が立っていた場所に来る増岡。

増岡「（モノ）このリアリティの無さはどうだ……。繰り返して見続けてきた、荒い走査線上に描かれたこの場所の風景

の方が、ずっと私にとってリアリティがある……。黒木
があの時、見ていたのは——」

黒木が見ていた方向に目を向ける増岡。

その視線の先には——、ただの壁しかない。

増岡「(モノ)ここにもしドアがあったとして、私にそれを開
ける勇気があるだろうか——」

壁のすぐ前に来て、そっと指でうす汚れた壁に触れ
てみる増岡。落胆と、少しの安堵。

増岡「(モノ)命を自ら立つ事より他に逃れられない程の恐怖
に、私は堪えられただろうか——」

と——、増岡の背後で、音がした。

ひゅうううう——。かすれた笛の様な音。

増岡はカメラを構えたまま、背後に振り向く。

増岡「！」

暗い地下道内を、過っていく四つ足で駆けていく者。
増岡は、本能に従ってレンズを操作しズームインし
て対象を追う。

痩せこけた白い膚の侏儒——なのか。顔は判然とし
ない。ただ、人の形をした四つ足の生き物だった。
と——、それは突如、増岡の方に振り向いた。

増岡「！」

へそれVの顔は、ボカシがかけられている。ただ、
虚ろに大きく口を開いている事は判った。

凝視する増岡の呼吸——、無意識に、押し潰した様
な音を立てている。

それは、恐怖の反応。

増岡、思わずカメラを顔から離す。

と、そこにいる筈の者の姿は、肉体の目には捉えら
れていない。

増岡「——」

○V／地下通路迷宮（地下道どこなのか判然としない地下通路）

現代の人間が、現代の技術で掘削し作り上げた地下

の通路——。だが、増岡が進んでいく程にその建設年次が古くなっていく。行き止まりかと思いきや、小さな鉄扉があった。ファインダから目を離し、肉体の目でそれを見る。

○扉前

扉は増岡の前に存在し続けていた。

増岡はノブに触れる事を躊躇っている。

増岡の呼吸は、喉を潰した様な音を立て、それと共に何処からか聞こえるかすれた笛の音が混じる。表情は強張り、脂汗が滲んでいる。

増岡「(モノ) そうだ……。未だ正体の知れない恐怖こそ、この扉を開けさせる」

ノブに手を伸ばし——、回しながら扉を開いた。

○V／長き階段

薄暗い中。真っ直ぐに地下へ向かう狭く細い階段。

増岡はそこを下っていく。

増岡「(モノ) この階段が作られたのは、そう昔の事ではなさそうだ。東京の地下には、我々にその存在を知らされる事のない地下施設があるという都市伝説がある。いや、単なる伝説ばかりではないのだろう」

○地下孔(これまでの地下鉄通路とは違う地下道)

コンクリート壁の広大な地下道に立つ増岡。

ナトリウム灯がポツポツと灯っている。

増岡「(モノ) 第二次大戦の頃、東京の地下は盛んに開発されていた。ここも、多く残されている戦跡の一つなのだろう。だが、今尚こうして細々とこの地下施設は生き長らえさせられている——」

カメラを構えながら歩く増岡。

と——、途中で壁際にうずくまる黒い影を捉える。
増岡の毛が逆立ち血圧が上昇する。

「なんだ、あれは……」

凝視し続ける増岡。

黒い影は動かない。

増岡、意を決し、近づいていく。

それは、やはり人間らしい。真っ黒に汚れた毛布にくるまり、じっと顔を伏せている。傍らには、何か濁った液体が入った2Lペットボトル。

増岡、カメラを顔の前から外し、凝視。

と——、僅かに動く人間。

増岡「！」

薄く開いた毛布の隙間から、ギラギラした目が覗き、錆び付いた包丁の刃先が見える。

毛布の男「（顔を見せないまま／しゃがれ声）あっち行け——」

増岡「——邪魔して、すみません……」

毛布の男「——」

増岡「（モノ）ホームレスは、人が集まる街に多い。

無論、他人との接触を拒むホームレスもいるだろう。だが、だが、何故彼はこれほどまでに警戒心が強いのだろうか。この様に安全な場所です」

毛布の男「——安全……？（モノローグに反応）」

と、男は毛布から頭を出した。

毛布の男「安全なんかじゃねえ」

増岡「え……？ どうして——」

毛布の男「——デロがいるんだよ」

増岡「（モノ）デロ……？」

毛布の男「デロに見つかっちゃったらな——」

増岡「……」

毛布の男「血を吸いつくされるんだ」

毛布の男、汚れた歯を見せながらニッと笑った。

更に建築年代が遡っている。

増岡「(モノ)東京の地下に、数多くのトンネルや施設が作られたのは、第二次大戦時以降ばかりではないらしい。もっと古い時代の遺跡も数多く残っていた筈だ。後に作られたトンネルは、そうした遺跡を利用して拡張されたものかもしれない。

狂気とは、人が己ではどうにもならない局面に対峙した時の安全弁の様なものではないだろうか。私は、あのホームレスの男と出会うずっと以前から、ぼんやりとそう考えていた」

深まっていく闇。増岡はカメラにLED照明を装着。増岡「(モノ)あの男も、恐怖に憑りつかれたのに違いない。私がこの地上と地続きにある冥府に来たのは、私の中に恐怖が萌芽しつつある事の証ではないのか。私はここに招かれたのだ。だが、何の為に……」

と――、何かが聞こえる。

壁の向こうから、何かくぐもった声が聞こえる。増岡は壁に耳をつける。

複数の人間が、口々に何かを喋っているらしいが、その内容はおろか性別も判らない。

増岡「(モノ)誰がいるのだ。この壁の向こうに――」

増岡は壁を必死に見回す。どこかに、向こう側へ行く方法がある筈だと――。

走り出す増岡。

○岩肌のトンネル

人が手で掘ったかのような隧道にまで来る増岡。数時間後、もしくは数日後なのかもしれない。

今は、あのくぐもった話し声は聞こえてこない。

座り込んでいる増岡。

掌や指先は擦りむけ、血が滲んでいた。

と――、トンネルの奥から足音が聞こえ始める。

増岡、ゆっくりとその音のする方を見る。

ランタンの明かりが揺れている。

じっと目を凝らし、その者が近づくのを待つ増岡。

増岡「(モノ) 疲弊した肉体は、精神を侵す。今の私に、正常な認識が出来ているという自信は無かった」

近づく足音とランタンの灯。

目を細め、じっと見つめる増岡——、その表情が驚愕へと変わる。

ランタンを持った男の顔がはっきり見えたのだ。

それは地下道でガソリンを爆発させ、死んだ男。

黒木「おや……、見たことがない人だね。最近来たんですか」
ぼそりとした口調だが、厭人的ではない。

増岡「——(独り言ち) 確かにここは黄泉の国だ……」

黒木「地底を死後の世界に準えた宗教もあったが、しかしそれは死後の世界が未知であるという意味でしかない。地底は、別なる世界だというのが世界共通の認識なのです」

増岡、立ち上がって黒木の顔をまじまじと見る。

増岡「——亡霊にしては饒舌ですね、黒木さん」

黒木「(アルカイックに笑み) 確かに私は亡霊なのかもしれない。そして確かに私は黒木という名前だった。あなたと会った事が？」

増岡「いえ、ただ私はあなたを見ていた——、正確には、ビデオカメラのファインダー越しに見ていただけです」

黒木「(やや思案) ふむ……。あなたは、地上の現実世界から逃避して来ている連中とは別らしい」

増岡「——その一人とはさっき——、いや、あれ……? とにかく既に会いました。ですが、私と彼とに決定的な差がある訳ではない」

黒木「(声無く笑い)」

並んで歩く増岡と黒木。増岡はビデオで黒木の喋る横顔を撮り続けている。

増岡「東京の地下が、これだけ広いものとは知りませんでした」
黒木「——東京だけではありません。世界の、およそ人が集ま

る様なところには、どこかに地下への入り口があるものです」

増岡「(オフ/やや警戒)それは、地球空洞説とかいう……」

黒木「御存知かどうか、地下に知られざる世界があるという概念には二種類あります。地球自体が完全に卵の殻の様に空洞であるという考え方と、世界中に地下交通網が張り巡らされているというもの——。前者の方は、実際にどうなのか私には判りません。しかし後者は、あなたがここにいる事実が証明していると言えるでしょう」

増岡「……」

黒木「南米では幾つも、巨大なトンネルの入り口が発見されているし、ベルギーのブリュッセルの地下には、ブリュッセルというもう一つの街があるとされています。チベットのポタラ宮の地下深くに、シャンバラと呼ばれる理想郷があるという伝説は、あなたも御存知でしょう」

増岡「その首都がアガルタとかいうんでしたっけ」

黒木「それは、ブラバツキー夫人が霊視した歴史ですな」

増岡「——そう言えば……、さっき会った地下生活者の男は、デロというものを非常に警戒していました……」

黒木「デトリメンタル・ロボットの略、デロですな。奴らは確かに危険です。目は退化しているが、聴覚は犬並みに鋭い。あなたも気をつけた方がいい」

増岡「思い出してきた……。デロっていうのは確か、フランク・シェイバーという男が1920年代に書いた空想小説に登場する——」

黒木「空想、フィクション——。しかし、その後そこに書かれている通りの事件が数多く起こって、虚構から現実に転換されたのです」

増岡「——なるほど。あなたが言いたいのは、シェイバー・ミステリーは、それが書かれた時には紛れなく虚構だったのだが、後に、その仮想の歴史を含めて事実になったと」

黒木「——(にっこりと笑み)あなたは飲み込みが早い人だ」

増岡「待ってください。私には未だ何も判っていない。私は、あなたが死ぬ直前に私に見せた、真なる恐怖の表情が何

によってもたらされたのか、それを知りたくてここまで来てしまったのです」

黒木「――（表情を消し）そうですか。私は死んでいるのですか……。ついにアガルタへ至る事も出来ないまま、肉体を失ったのか……」

増岡「――」

黒木、ランタンを口元に持っていく。黒木が自ら貫いた側の眼窩は黒く影に落ち込んで見えない。

黒木「私があるの前で死んでいたのなら、これ以上、あなたと会話をすべきではないでしょう」

増岡「ま、待ってください！」

黒木、ランタンに口で風を吹き込み――、

漆黒の闇となった。

増岡、カメラ上のLEDを点けようとするが、なかなか点かない。

増岡「（モノ）既に私は正気を失っているというならそれでもいい。私はそれでも真なる恐怖の正体を見たい。その恐怖を認識出来るだけの正気は保っていたかった――」

やっとスイッチを手さぐりで探し――、

LEDの弱々しい光が点いた。

その途端、いきなり視界が開け、眩い光に眼を眩ます増岡。

○狂気山脈

LEDの淡い光は、その空間に満ちているごく小さな雲母に反射され、その広大なる空間自体をも浮かび上がらせる。

増岡「――」

呆然と見下ろしている増岡。

増岡「（モノ）狂気山脈――。その谷間には都市の廃墟があるに違いない。人の文明ではない。狭い穴を這いずる体型の高等生物が築いた都市――」

○狂気都市廃墟

だが、増岡が今そこにいるのは、火災によって放逐されそのまま廃墟になったかの様な、人の世界のそれに近しい場所。彷徨い歩く増岡――。

増岡「(モノ)ここにいるのは、私一人ではない筈だ。私にはその確信があった……」

○同／Fの部屋

そして増岡は、それを見つけた。

赤いソファに横たわる白い裸身――。

増岡はそれに近づく。

細い脚の足首には、錆びた鎖が繋がれている。

長い髪を避けて、その顔を見る増岡。

増岡「……」

あどけなさが残る少女――。しかし増岡に触れられなくても目を開けようとしなかった。

暫くそのまま、黙って少女を見下ろしている増岡。

増岡「(モノ)全てが私の無意識が見せた幻想だった――」

――溶暗

○V／増岡の部屋／午後

天井設置カメラの映像。

遮光カーテンで薄暗い室内。机周りは無人。

ベッドは、毛布が人の形で山となっている。

○V／増岡の部屋／外

マンションの廊下にいる増岡。外側からかけられる鍵を取り付けている。

○V／映像制作会社／応接コーナー

机上の鞆の中から撮られている映像。

ラフな格好の男が席に戻ってくる。

森 「お待たせしちゃいました」

増岡 「(顔は見えず) いえ」

森は、履歴書を手にとって眺めながら――

森 「増岡さんは――、報道関係が専門、て感じですか」

増岡 「(オフ) たまたま、以前所属していた会社がそうだったというだけで……」

森 「ウチとかですと、安い企業VPなんかもやるし、たまにドラマなんかも来ますし、何でもアリです」

増岡 「……」

森 「取り敢えず、登録契約って事でどうですかね。仕事があればっていうアレなんですけど」

増岡 「――(オフ) はい。結構です」

○V／増岡の部屋／夕刻

毛布の形がやや変わっている。

と――、毛布の端にトリミング・アップ。

細い足首が覗いている。鎖に繋がれた跡が痛々しい。

○V／携帯ショップ店頭

やはり鞆内カメラの映像。

女性店員 「――こちらの機種ですけれど、この液晶で動画も表示出来ます。ペットをお飼いになられてる様なご家庭ですと、留守の間にネコちゃんがどうしてるか、なんて見れたりするんですよ」

○V／街のモニタージュ／夕刻／夜

増岡が移動している時に、目に触れた風景――。
ただ猥雑である街。

地下鉄の車内。地上の延長でしかないトンネル。

○増岡の部屋

鍵が開き、コンビニの袋を下げて帰宅する増岡。
スタンドライトを点け、ほの明るくした。

と、ベッドにいない事に気づく増岡。
やや狼狽し、室内を見回す。

と——、少女は机の下でうずくまる様に眠っていた。
増岡が着せた、ロングTシャツ姿。

ベッドに腰掛け、シリアルバーを齧っている増岡。
モニタには、昨日までに彼が撮った少女のビデオが
プレイバックされている。

増岡にされるがままの少女——。躰の各部位の接写。
殆どの部位は通常の間人と変わらないが、眼球と口
腔内は違っている。

眼球は遠目には普通だが、瞳孔が開ききっている。
歯は、小さく尖ったものが並んでいるだけ。まるで
鮫の様に、二列になっている。

だが——、黙ってレンズを見つめる少女の顔自体は
陶器の人形の様子、人工的な美を感じさせた。

椅子にやっと座らせる事が出来た。

増岡はミルクが入ったマグに指を入れ、充分に冷えて
いる事を確認し、少女に飲ませようと差し出す。
小さく鼻を鳴らし、匂いを嗅ぐ少女——、気分が悪
くなった様な表情をして顔を背ける。

嘆息する増岡。

○V／増岡の部屋

増岡の留守の間も、室内各所の固定カメラが少女を
監視していた。

増岡「(モノ)少女の事を『F』と仮に呼ぶ事にした。実際にそう声を出して彼女の事を呼ぶ事は殆どないのだが。まるでカスパール・ハウゼルの様だ。実際の年齢は判らないが、生まれてから私と出会うまで、人間と一切触れずに育ったのだろうか」

Fは、部屋のそこで寝ころがり、天井のある一点を凝視していたかと思うと、うろろろと室内を四つ足で歩き回る。

増岡「(モノ)一日に一回、躰を拭いてやる以外に、私がFに出来る事は無かった。Fは一切何も食べようともせず、水すらも飲まない。一日の内、起きているのは3時間くらいのものでらう」

○V/ENG取材映像／繁華街

若いタレントがカメラに向かって微笑む。

ディレクター「(オフ)はい、じゃ回して」

増岡「(ボソリと)回りました」

ディレクター「5秒前、4、3——」

レポーター、深呼吸をして——

○V/繁華街

収録の合間、道端でディレクターとレポーターが打合せをしている。

増岡はガードレールに腰を下ろし、買ったばかりのテレビ携帯の液晶を見ている。

増岡の部屋が映っていた。

Fは、液晶ディスプレイ群に映る映像に見入っていた。一つの映像に飽きると次の『窓』へ。貪欲に視覚情報を受容しようとしている。

○増岡の部屋

椅子にFを座らせ、増岡は中腰になって、自分の口元をFに見せている。

増岡「ま、す、お、か、た、く、よ、し」

Fは僅かに口を開くが、声を出そうとはしない。

増岡は辛抱強く、自分の名前を呼ばせようと試み続ける。

増岡「(モノ)ひよっとしたら、声帯そのものが萎縮して機能しないのかもしれない。声など出す必要の無い世界からこのFは来たのだ……」

○V／ショッピング・モール

少女向けのブティック。

若い店員が話しかけてくる。

店員「お嬢様はお幾つですか？」

増岡「——(やや狼狽)娘、じゃなくて……」

店員「プレゼントなさるんですね。身長はお幾つくらい？」

増岡「多分……、150とかそれくらい……」

店員「(服を見せ)かわいいでしょー、これ。すごく今人気あるんですよ。きつと喜ばれると思いますよー」

増岡「——もうちょっとその……、地味なんでもいいと思うんだけど……」

店員「地味、ですかあ？ うーん……」

他の服を探し始める店員。

○地下道

ブティックの袋を持った増岡が、地下道を歩く。

多くのテナントが並ぶ、繁華街の地下モール。

ふと気になって立ち止まり、携帯を取り出して操作。ややしてネゴシエーションし、液晶に部屋が映る。

増岡「……？」

ペタリと床に座っているF。そのカメラから死角になつているところを見つめている。

凝視する増岡。

Fは喋ってはいないが、一点を見つめ、首をかくんかくんと動かして反応している。

増岡「(モノ) Fは一体、誰と会話しているのだ——」
ハッと首筋に冷たい気配を感じ、振り向く。

増岡「！」

黒いソフト帽、黒眼鏡、黒いマスク、襟を立てた黒いコートがすぐ背後に立っており、携帯を覗き込んでいた。

思わず携帯を後ろ手に隠し、後退る増岡。

黒づくめの者はその場を動かさず、黒眼鏡の奥からじっと増岡を見つめている——らしい。

増岡、ゆっくりと後退、雑踏の中へ走り込んでいく。

○増岡の部屋／外

外鍵をもちかすように解錠している増岡。

と——、マンションの廊下の向こうで、黒っぽい影が動いた。

チラッと伺う増岡。

陰の中にじっと佇む、主婦らしき女。増岡を見つめている。

見られている事に狼狽し、増岡はなかなか鍵が開けられない。

今にも声をかけてきそうな顔で、少し近づいてくる女。

鍵が開いたと同時に増岡は鉄扉を開き、ボタンと閉じて内側から施錠。

○増岡の部屋

息をやや切らし、室内へ入ってくる増岡。

サッと見直し——、Fがベッドに横たわっているのを見て安堵——。が……、

増岡「——おい……」

口をパクパクさせ、やや苦しそうな寝顔のF。

増岡「(呟く) だから！ 何も飲まないからだ！」

温めたミルクのマグを持ってきた増岡、Fを仰向けにし、口の中へ強制的にミルクを流し込む。

F 「ぐえっ！ ぐえええっ！」

激しく身悶えし、胃からミルクを絞り出すF。

呆然と立ち尽くし、床で苦しんでいるFを見下ろしている増岡——。

デスク前に座り、室内をワッチしていた映像をプレイバックしている増岡。

数カ所に設置されたカメラの映像が、別々のモニタに映っており、増岡は視線を激しく動かしながら、異状を探している。

Fは増岡の足元で、躰を丸めて寝入っている。

と——、一つのモニタがブラックアウトした。

増岡「——ん？」

と、次々と別のアングルのモニタが消えていく。

スイッチャー・ボードのスイッチを激しく叩く増岡。ややして、消えていたモニタに次々と映像が映る。

増岡はリワインドさせ、ブラックアウトしたデュレクションを計る。

増岡「(モノ) 12秒——」

別のアングルの映像も同様だった。

増岡「(モノ) この12秒の間に、ここで一体何が起こっているのだ……」

漠然とした不安——。

と！ いきなりけたたましくFM音源の呼び出し音が室内に響く。

狼狽し、鞆を取り上げ、中から携帯を取り出す増岡。

増岡「——はい」

受話器から、極く低くジジジというノイズだけが聞

こえる。

増岡「(やや強く)誰です」

声「——誰カ、トイウ様ナ事ハ問題ノ本質デハナイ」

増岡「——え……?」

男とも女ともつかぬ、電氣的な変調をかけているかの様な不自然な声。

増岡「あの、間違いじゃないんですか? この番号は——」

声「間違イジャアリマセンヨ、増岡サン」

増岡「——(慄然)」

声「アナタハ大変ナ事ヲシテイル。ソノ自覚ガアリマスカ」

増岡「——何の——、事です……」

声「ソコニイテハイケナイ者ヲ、連レテキテイルデシヨウ」

増岡「——」

声「ソコデハ生キラレナイノデスヨ、ワカリマスネ?」

増岡「——」

声「アナタハ、ソレヲ救ツタキニナツテイル。シカシ、アナタハ逆ニ、ソレヲ殺ソウトシテイルノデス」

増岡「……仕方ないじゃないか! 何も食べないし、何も飲んでもくれない! どうしたらいいっていうんだ」
判るなら教えてくれ!
ツー ツー ツー——。

増岡、悄然とした顔で受話器を耳から離す。

ふと気づき、着信歴を表示させる。

「公衆電話」

○マンション・エントランス

俯き加減にエレベータから降りてきた増岡、周囲を用心深く窺いながら外に出て行く。

○マンション付近

マンションを望むところにある公衆電話。しかしそこに人の気配は無い。

増岡、そこからマンションに振り向き、Vカメラのファインダを覗く。
増岡の部屋の窓。カーテンが閉まっている。

○街

撮るでもなしに、ビデオカメラを胸元に抱え立っている増岡。

増岡の周囲を歩く雑踏の顔、ややぼけている。

彼にとってのリアリティが失われつつあるのだ。

増岡「(モノ)このまま、Fが衰弱していくのを、私はただ観察しているべきなのか。私はFに何を求めているのだろう。言葉を覚えさせ、人としての感情を甦らせ——、そしてどうなるというのか——」

と、いきなり前に立ちはだかる中年の男。

増岡「？」

男「さっき、僕の顔撮ったでしょ」

鼠色のスーツを着た、神経質そうな男。

増岡「——いえ」

男「何言ってるんだ。それでさっき、あそこにいた僕撮ったでしょうが！」

増岡「回してないですよ」

男「困るんだよ！ そのテープ出さない」

増岡「何故困るんです。困る様な事でもしていたんですか」

男「(逆上) ざけた事言うな！ 貸せ！」

男、いきなり増岡からカメラを奪おうと掴みかかる。

増岡、身をやや屈め、それに抗う。

雑踏の中で、まるで子どもの喧嘩の様な揉み合いをしている二人。

男「うがああああっ！」

無理矢理カメラを引き離そうと、尋常ではない力を振り回す男。

ガッ！ カメラが増岡の顔面を痛打。

それでもカメラを離さない増岡に苛立ち、今度は男

がわざとカメラを増岡の額に打ちつける。
呻き声を漏らし、その場に座り込む増岡。
男はカメラからテープを抜き取り、蓋が開いたまま
のカメラを増岡の前に叩き落として足早に去る。
増岡は呆然と暫しそのままの姿勢でいたが――、割
れたレンズを拾おうと指を伸ばし――、指先を割っ
てしまう。
血管を切ってしまったのか、鮮血が指先を真っ赤に
染めていく。

○マンション付近へエントランス

傷の痛みを堪えながら戻ってくる増岡。と――、
入り口脇に、あの主婦らしき女が佇み、何かを言い
たげな顔で増岡を見つめている。
暫く見つめ合う様に佇む増岡。
――「危険」という信号。増岡、ハッとなってエレ
ベータに向かって小走りに駆けだす。
近づいてくる女。
増岡、苛立たしげに「閉」ボタンを叩く。
女が近づく前に閉じる扉。

○増岡の部屋

力無く、部屋へ戻ってくる増岡。
指先はハンカチで包まれている。
Fが眠っているベッド脇に腰を下ろす増岡。
と――、Fがむくりと起き出し、ずるずるとベッド
脇にまで降りてくる。

増岡「――やあ……。ただいま。今日も、ずっと眠ってたのか」
Fはくんくん、と鼻を鳴らし、増岡の指先に顔を近
づけている。

増岡「大した事ないんだ。ヘマをしてな……」
増岡、指を顔の前に持ち上げ、血で汚れたハンカチ

を取り去る。

やっと凝固し始めた傷が露に。

じっとそれを見つめるF。

その瞳——。欲望が、Fの瞳を妖しく輝かせている。

増岡「……」

Fが何を求めているのか——、増岡は判った気がした。増岡はFの口元に、傷ついた指先を向ける。

Fは舌先で凝固した血を嘗める。

ザラザラとした細かい突起があるらしく、Fの舌は傷を更に苛む。だが、既に凝固している血はすぐに嘗めとられてしまう。

Fは、躰の奥で火が点きかけた本能的欲望を抑える術を知らず、身悶えしている。

それをじっと見つめていた増岡——、立ち上がる。

工具箱から、大型カッターを取り出す増岡。

古い刃先を折って、真新しい刃に。

じっとその仕種を見つめているF。

床に、半透明のゴミ袋を広げて敷く。

準備は整った。

腕をまくり上げ、増岡は己の腕——太い血管を避け

て——にカッターの刃をすっ、と入れる。

痛覚に僅かに顔を歪める増岡。

目を見開くF。

ポト　ポト　ポト……

ゴミ袋のシートに血が滴り落ちていく。

Fは屈んでそれを舌先で嘗めとっていく。

増岡「……」

顔を増岡の方に見上げるF。唇の周りが血でやや紅く染まっている。

「いいんだ」と、小さく頷く増岡。

Fはおずおずと、増岡の白い腕に唇を寄せ——喉を鳴らしながら湧き出る血を飲み下していく。カリカリとシーク音が低く響く静かな部屋。

Fはうっとりとした顔で、ずっと増岡の腕に口をつ
け続けている。

そのFを眩しそうに見つめている増岡。

長い時間、ずっとそのままにいる二人――。

――溶暗

○断章

漆黒の画面。

増岡「(モノ)ずっとそのまま、Fが満足するまで、そうして
いたいと私は思った。だが、それは私の肉体の消滅を意
味する。私は、己の命が惜しい訳ではない。だが、私と
いう存在がいなくなった時のFの事を想像したくなかつ
たのだ」

時折、フラッシュがインサートされる。

▼頬にやや紅が差し、顔が輝いているF――。

▼血のイメエジ

▼鳩の死骸

▼猫の死骸

それらの部分、断片――そして全貌。

増岡「(モノ)Fは、獣の血でも最初は我慢をして飲んでくれ
たが、人の血以上にFを満足させるものは無かった」

○イメエジ

増岡に向かって、Fが微笑みかける。

笑顔を初めて見せている。

増岡「(モノ)私は、Fを人間として育てる事を放棄した。私
はFを飼育している。そう。それ以上の言葉を使うべき
ではない。それ以上の感情を抱くべきではないのだ」

○V／増岡の部屋

かつて増岡がそうした様に、机に頬杖をつき、眼前

のディスプレイ群が写し出す映像を受容しているF。
増岡「(モノ)少しづつ、人らしい動きをする様になった気がする。だがこれは、私と一緒にいるが故に模倣しているだけなのかもしれない。」

Fは——、一体なんなのだろう……」

ディスプレイの様々に映ろう蛍光がFの顔を様々な色に染め上げていく。

増岡「(モノ)何故、動物の血液しか受け付けないのか。これは想像がつく。Fは生まれ落ちた時から、母親の乳の代わりに血を飲まされて育ったのだ。」

そんな育て方をする人間などいまい——。Fが何者であれ——、Fは地下に棲む何者か——テロと仮に呼ぶとして、彼らに育てられたと考えるべきだ」

明るい昼間の映像がディスプレイに映っている。

Fは眩しそうにそれを見つめている。

○住宅街／夕刻

駅からマンションへ歩いていく増岡。

と——、電柱の脇にじっと立っていた者が、増岡の前にいきなり姿を見せる。

増岡「！」

それは——、あの主婦らしき女。

綾「——あなた」

増岡「……」

綾「(増岡の包帯の腕を見て) 怪我でもしたの……?」

増岡「誰です」

綾「(弱々しく笑い) 何、言っているのよ……。そんな事より用事があるの」

増岡「(訝しみの目) 誰なんですあなたは」

綾「ふざけるのもいい加減にして! 冬美がいなくなったの。警察にも届けてあるけど——、あたし、あなたが——」

増岡「(当惑) フユミ……?」

綾「あなたのところにいるんじゃないの?」

増岡「フユミって誰なんです」

綾「（信じられないという顔）——どして……、どしてそんな風な事言えるの……？」

増岡「フユミなんて、私は知らない。あなたも見知らぬ人だ」

綾「自分の娘の事——、よくも——、よくもそんな——」

増岡「どいてください」

増岡、女の前から抜け、足早に歩きだす。

女は般若の如き形相で増岡を睨んでいる。

増岡、暫く歩いてからカメラを構えて振り向く。

ヴェウファ越しに映る、女。

しかしその顔にはボカシがかかっている。

増岡「（モノ）狂気とは伝播するものなのだろうか……。何故私の周囲には、狂気が近づくのだろうか……」

○増岡の部屋前

エレベータを降り、自室ドア前に来る増岡——。

増岡「!？」

外鍵が強い力でねじ切れていた。

血が逆流する感覚。

震える手でドアを一気に開く増岡。

○増岡の部屋

飛び込んできた増岡、部屋を見回す。

机が倒され、液晶のアームが重なる様に崩れ、砂嵐を映し出している。

ベッドの上、下、納戸——、いそうな場所全てを見て回る増岡。

しかし、Fの姿は消えていた。

髪をかきむしり、必死に思考する増岡。

○住宅街

宛ても無く、必死に見回しながら走る増岡。
増岡「(モノ)自分の意志で出ていったのなら、未だまともに歩けもしない。そんなに遠くへは行っていない筈。だが、だもし——、別の誰かが連れ出したのだとしたら——」
焦燥感で歯をぎりぎり食いしぼる増岡。

○線路沿いの道

日が暮れていく。
既に増岡の体力は尽きようとしており、気力だけで歩いてきた。しかし——、貧血が彼を襲う。
眩暈——。螺旋の様に振れる視界。
と——、街灯の下に立つ長身の影が見えた。

増岡「……」

黒いソフト帽、黒眼鏡に黒マスク、襟を立てた黒コート
の男が増岡を凝視している。

増岡「——(掠れた声)返せよ……」

黒い影は答えない。

増岡「——Fは渡さない……。私が——見つけたんだ……。歪む視界の中で、黒い影の男がこちらに近づいてくるのが見える。」

増岡「——返して、くれ……」

増岡の吐息、押し潰れていく。

と——、遠くより聞こえる、笛の様な音。

増岡「(モノ)教えて欲しい——。Fは、あの地底の廃墟へ帰ってしまったのか……?」

声 「ヤッパリ、アナタニハ無理ダッタノデスネ」

増岡「——」

声 「ヒョトシタラ、アナタナラ、アレヲ所有デキルカト期待シテイタノデスガ」
目を閉じる増岡。

——溶暗

○増岡の部屋

よろけながら、帰ってくる増岡。

と——、床で丸くなって眠っているFがいた。

増岡「……」

Fの指先、そして顔には赤黒く固まった血がこびりついていた。

増岡「……」

Fの傍らに座り、そっとFの髪を撫でる増岡。

何時間も、じっとそのままに続けた——。

新聞を広げながら、モニタをぼんやりと眺めている増岡。

増岡「(モノ) Fが一体何で飢えを癒したのか、結局判らないままだった。ただ、少なくとも今のFには、十分な栄養が必要だという事は確かだった」

ベッドで眠っているF。

その細い足首には、鉄パイプ接合用の金具による枷が嵌められ、チェーンでベッドの鉄柱と結ばれている。Fにとって、その状態は不快なものではないらしい。飢えていない時には——。

モニタ群に映る、見知らぬ人々の顔、顔——。

感情無く、じっとそれらを眺めている増岡。

徐々に、予めそれしか残されていなかった回答へと帰着していく——。

○マンション外

大きなポストンバッグを担いだ増岡が出てくる。

電柱陰に、あの女がいた。

わざと増岡は、女の脇を通り抜けていく。

女は何か言いたげな顔で増岡の後を追っていく。

○住宅街の道

数mの間隔を空けて、増岡と女が歩いていく。
民家が少なくなり、荒漠とした区画へ。
女は堪え切れず、声を出す。

綾 「ちよっと待ってよ！ ちゃんと話聞いてよ！」

増岡は振り向かない。

綾 「あなたには説明する義務があるのよ！」

○鉄道高架近く

ゴオオオオ—— 高架を走る電車の轟音。
何かを喚いている女。しかしその声は聞こえない。
ここならば、人に見られる事はない。

用具小屋の裏に回った増岡を追って、女が小屋の裏
に入っていく。

女はヒステリックに何か喚いているが——、

ゴオオオオオオオオオオ

再び電車が通過した後には、静かになっていた。

ぶらりと垂れ下がる、ビニールシート。

その中には、女であった肉体が逆さになっている。
ビニールシートの下には、漏斗の差し込まれたポリ
の灯油タンクが、ビニールシートの内側から滴る体
液を受けている。

そこからやや離れたところに腰を下ろし、ぼんやり
と遠くを眺めている増岡——。

ポリタンク半分程に液体が溜まっている。

増岡は、屈み込み、ビニールシートをまくって、カ
メラのレンズを向けた。

ヴェウファに映る、女の逆さになった顔。だがそれ
にはボカシがかかっている。

増岡「——」

ポリタンクの入ったポストンバッグを肩に担ぎ、住宅街の方に戻っていく増岡。

○増岡の部屋

ペットボトルに小分けされた血液が冷蔵庫に並べられていく。

哺乳瓶で血を貪欲に呑むF。

無表情に、その様子をビデオで撮影している増岡。

○V／Fの肖像

増岡が撮り溜めた、Fを写した映像のモニタージュ。何気ない仕種、無意識の媚び。

野生の処女性と、本能的な女の性。

少なくともそれらの視覚記憶は、撮影者を深く満足させ得るものだった。

○V／夜の公園

他に人の気配無き、木々に囲まれた公園。

被写体となっているのは、ギャル系の少女。スナック菓子をぼりぼりと齧っている。

国 美「どうせAVとかで売るんでしょ。あと5万だな」

増 岡「(オフ) 5万円でもいいのか……」

国 美「(苦笑) ちっ。10万とか言えば良かった」

増 岡「(オフ) そんなにお腹空いてたんだ」

国 美「(スナック菓子容器を見せ) これ? ダイエット食」

増 岡「(オフ) ウチにも、腹を空かせた奴が待ってるんだ」

国 美「(怪訝) ふうん……? で、ここでやんの? インタヴ

ユウ(クスッ)。(演技で) 初体験ですかあ? そうだ

なあ、昨日だったかなあ? 一昨日かなあ?」

顎の下で、可愛らしくポーズをとっている少女。

国 美「？ その顎に増岡の指が伸び、白く細い喉を露出させる。何？ 喉フェチ？」

国 美「！ すっ、とその白く細い頸に大型カッターの刃が入る。刃が抜かれると、ぱっくりと開いた傷口から血が泡と共に零れだす。うがいをしている様な喉音をたてて苦しむ国美。」

その姿を冷徹に記録している増岡のカメラ。レンズに血飛沫が飛ぶ。その奥——恐怖の目で、レンズを見ている少女。

増 岡「（モノ）恐怖している顔は、美しい……。だが、己の死を恐れる時の恐怖は、凡庸なのだ……。——、カメラが回転され、増岡の顔の接写となる。自らの顔を写している。

感情が拭い取られた、疲弊した男の顔——。

増 岡「（モノ）これは一体誰なのだろう……。——」

○増岡の部屋

哺乳瓶にむしゃぶりつく様に、血を飲んでるF。増岡は、ふと机上に置かれていた携帯を手にとる。着信履歴を表示させる。

「公衆電話」

その番号にリダイヤル。

○住宅街

ポツンと立つ無人の公衆電話。と、呼び出しベルが鳴り出す。

○増岡の部屋

呼び出し音をじっと聞いている増岡。と、回線が繋がった。

しかし、何も向こうからは喋りかけてこない。

増岡「——もしもし？ 聞いていますか？ 今、Fは満ち足りた顔をしています。私がそうさせてやったのです」

F、増岡の方を見上げている。

増岡「もうあなたには文句がない筈だ。そうでしょう？」

ややして——、

声 「——ソウデスネ。アナタが正シイデス」
満足げに微笑む増岡。

○黒味（公園）

雑然としたノイズ——。

ディレクター「（オフ）いくよ！ VTR回した！」
レンズキャップが外され、急速にピントが合わされると、公園の場面となる。

他にもう一組のENGクルーが背後に。
レポーター、マイクを握り、髪をしきりに気にしている。

ディレクター「5秒前、4、3——」
レポーター「今朝、この公園に犬の散歩に訪れた近所の方が、あちらに見えます公衆トイレの裏手で、夥しい血痕を発見しました。現場には、スナック菓子の容器などが落ちており、何か事件があったのではないかと警察では見て捜査を進めています」

カメラはレポーターから視点を外し、奥の繁みの方へズーム。

警察によりテープで現場を囲ってある。

ディレクター「——（オフ）はいカットお……」

しかし、カメラは回り続けている。
繁みの暗がりを見つめ続けている。

ディレクター「（オフ）増岡さん、もういいですよ」

何か——、白い人影が——、見える——。

ディレクター「（オフ/レポーターに）そいじゃあねえ、今度あっちでもう一発撮りますから」

エクステンダーを入れ、高倍率になるカメラ。繁みの暗がりの中に立ち、こちらを向いて立っている若い女——、あの女子高生。眼球が欠落し、黒い孔だけの目。口は——、何かを喋っているかの様にゆっくりと動いている。グラリ、と揺れる映像。

○V／駅前広場

ベンチに腰を下ろしている増岡。

脇には、いつものDVカムが増岡の横顔を見上げている。

増岡「人間は退化した生き物なんだと思う……。リアリティとフレームの中でしか認知出来ない今の人間ではなく、古代の存在——、それは人間という形ではなかったかもしれないが、リアル・ワールドに気まぐれに入り込んでくる、そう、稀人の様な存在に気づいていた筈だ……」

○増岡の部屋

Fの足首の枷を解錠する増岡。

ベッドにペタリと座っているFは、増岡をじっと見つめている。

増岡「立ってごらん」

Fはキョトンとしている。

増岡はFの腕をとって、二本の脚で立たせる。

少し猫背なのを直してやる。

○街

少女服ブティックで求めた、ロリータ風の衣装を着たFと、並んで歩く増岡。

二人の腕はバンダナで縛られている。その下側には手錠がかかっているのだが、外側からは見えない。

歩きながら、増岡はFの横顔をビデオで撮っている。親子——にしても不自然な男女。だが、それを気にする者は周りにはいない。

Fには普通の少女の様な感性が芽生え始めている様。人が多い街中の騒音にも慣れてきている。

時に笑みを浮かべ、ファンシーなディスプレイを見つめるF。

と——、Fは増岡の「目」であるレンズを、何か懇願する様な目で見ると。

○カラオケ店個室

ガラス張りのドアは、外から覗こうと思えば容易に出来る程度の、密室。床に落ちているバンダナと、手錠。

そこで二人は躰を寄り添っていた。

Fは身を屈めて増岡の手首に唇をつけている。

激しいFの吸引に、血圧が下がっているらしい。

「もういいだろう？」と、ゆっくりとFの顔を手首から離す。

紅く染まった唇を少しすぼめ、不満そうな顔のF。

増岡はダスターで手首を拭い、バンダナで止血。

Fは、少し酒に酔った風にソファにもたれる。

増岡、立ち上がり、ドアの方へ向かう。

Fは気にしていない。

○個室外

ドアを開け、出てきた増岡、ドアを閉じて——、ガラス越しにFを暫し見つめていたが——、歩きだす。

○電車内

ぼんやりと窓外を眺めている増岡。

景色は猥雑な街から、海岸沿いに。

増岡「(モノ) 私はそれから、行き先を決めず電車に乗った」

○防波堤

膝を抱え、海を見つめている増岡。

カメラがある訳ではないのに、増岡の視界には時折
走査線ノイズが走る。

海鳥の声――。

増岡「(モノ) 何週間の間、私はここにいたのだろう――。

いずれ、近くの温泉町で住み込みの仕事を見つけ、そこでただじっと老いるのを待っている――そんな未来が見えていた……」

と――、増岡の背後に立つ男の影。

黒木の声「――帰りたい、ですかね？」

増岡、見上げる。

増岡「――帰りたい……？」

黒木「我々は皆、海の奥底深きところから来たのです。御存知
でしょうか？」

増岡「――そう、でしたね……」

黒木「尋常ならざる水圧の下で、海底を這っていた。しかし、
今の我々よりも、ずっと叡知に富んでいた」

増岡「――」

増岡は再び、海の向こうに目を向ける。

増岡「――あなたは――、何を見たのですか……？」

黒木「――は？」

増岡「――あの地下道で、自分の目を抉るに前です。あなたの
顔は、真なる恐怖を見たという顔をしていた」

黒木「――ええ……、そうでしたね……」

増岡「どうして私は、そのあなたが見た、感じた恐怖に憧憬を
抱いてしまうのだろう……」

黒木「――それは、未知なるものだからですよ」

増岡「……」

黒木「真なる恐怖は、我々の無意識の中に封じ込められている、

古えの叡知がもたらすものだからです」

増岡「——そう、なのかもしれない。そうでないという気もしますが」

じつと海を見ている増岡。

その背後に、黒木なる男などいない。最初から。

○東京／繁華街近くの公園

早朝。女子高生が殺された公園。

繁みの中に段ボールハウス。

そこからもぞもぞと出てくる、薄汚れた服の増岡。

冷たい水道で顔を洗っている。

そうした生活が、季節が移ろう程の間、続いている。

タオルで顔を拭う増岡。

手首の傷は既に癒えて久しい。

じつと傷跡を見つめる増岡——。

増岡「(モノ)私の狂気は——、真実のものではなかった。私は狂気に、いや、狂気もたらしてくれるであろう真なる恐怖に憧憬を抱き、意識的に狂気を装っていたに過ぎなかった。私は別れた妻をこの手で殺し、自分の娘を獣の様に飼育し、無関係な人間までも殺した。そこまでも尚、私は真実の狂気に至る事が出来ないでいる——。それ程までに、私は退化してしまっていた」

○トンネル

住宅街ではなく、高低差ある土地の交通路。

背中を丸め、そこを歩いている増岡。

ふと増岡、目を遠くに向ける。

トンネルの出口辺りを、白いものが過っていく。

白い肌の痩せこけた四つ足で歩く侏儒。

増岡「……デロ……」

その者がトンネルから出て消えるまで、その場に立

ちすくんで見ていた増岡——。

と！いきなりFM音源の呼び出し音がトンネル内に鳴り響く。

増岡、見回すと、側溝でLEDが眩く明滅していた。携帯電話を拾い上げ——、耳に当てる。

増岡「——？」

何も聞こえない——。否——、掠れた笛の様な音が微かに聞こえる。Fの吐息の様な——。

増岡の躰に戦慄が走っている。

増岡「(モノ)あの怪物はまだ存在している。私の部屋で……」

増岡は携帯を棄て、よろけながら気持ちだけは走ろうと移動を始める。

転がっている携帯の液晶には——、増岡自身の顔が映っていた。その表情は恐怖に満ち満ちて——

○マンション前

不浄なる城。建物自体が既に、瘴気を漂わせそこに建っている。

増岡は、自分の部屋がある辺りの窓を見上げている。無根拠なる抑圧が増岡をそこに釘付けにしている。

しかし——、行かなければならない——。エントランスに向かって歩き始める増岡。

○エントランス

増岡、エレベータ前へ。ドアが開き、中に。

○エレベータ内

上昇していくモーター音が低く響く。

じっと階表示灯を見上げている増岡。

その、増岡の背後に——、人が立っている。

増岡はそれに気づいているが、振り向かない。

背後に立っているのは――、女。
増岡の妻だった、女。ポケてはいるが、双眸が黒く
落ち込んでいるのは判る。
と、指定したフロアに到着しドアが開いた。
増岡は振り向かずままた、戸外へ。

○廊下

エレベータから、己の部屋までの通路――。

増岡「――」

ドアの入り口には、郵便物や新聞が突っ込めるだけ
詰め込まれ溢れている。

増岡の呼吸は、押し潰れた音を発している。
顔は強張り、脂汗が滲んでいる。

ほんの数mの距離が、果てし無い長さに感じられる。
ドアに近づくにつれ、増岡の心臓に対する締めつけ
が強くなっていく。

やっこの思いでドア前に辿り着く増岡。

外鍵は壊されていた。

増岡は、ポケットをまさぐり、ある物を取り出して
握る。血液が固着したままの、大型カッター。

ノブに手をかける増岡。

○増岡の部屋

立ち込める臭気に、思わず鼻を覆う増岡。

締め切った暗い室内の中央――、デスクを囲むディ
スプレイ群が、砂嵐を映し続け、デスクの上に丸く
なり横たわっているFの姿を浮かび上がらせている。

増岡「――」

Fは再び真っ白な膚となり、痩せこけた姿。

増岡「(モノ)――Fはまるで冬眠しているかの様だった」

激しい悔恨を顔に浮べ、じっとFを見つめる増岡。
と――、Fの目脂で固まった瞼が僅かに蠢く。

増岡「――」

干からびきった唇が、動いた。

F 「――（掠れた声）帰って――きたんだ……」

言葉――。増岡に、Fが言葉をかけてくれた。

激しい感情が一気に増岡に押し寄せる。

増岡は――、持っていたカッターを持ち上げ――、

舌を震えさせながら口を開いて――、一気にカッター

の刃を口腔内に突き入れる。

千切れた舌の先が、カッターと共に机に落ちる。

夥しい血を唇から流しながら、増岡はFの躰を抱き

上げる。

ゆっくりと、目を薄く開けるF。

増岡「（モノ）呑むんだ。構わない。呑んでくれ」

Fは、増岡の顎に滴る血にそっと唇を触れさせる。

まだ吸うだけの力もない。ただ、唇を伝って流れて

くる増岡の血を口腔内に伝えるだけ。

だが――、しだいにFの躰に力が甦っていく。

抱いている増岡の躰をしっかりと掴み――、

増岡の唇から強く血を吸っていく。

Fは途中、激しくむせるが、尚も貪欲に増岡の血を

飲み続けていく。

増岡はそれを幸福に感じていた――。

○無人の増岡の部屋

一つだけ、点灯しているディスプレイ。

そこには、増岡が撮った、地下へ下っていく時の映

像が映し出されている。

○長い地下へ下る階段

Fの手を引きながら、長い階段をゆっくりと下っていく増岡。閉じられた唇周りは、無造作に血の跡が拭われている。

増岡「(モノ)そして私は、言葉を失った。もう必要ないのだから——」

ふと、増岡はFの顔を見下ろす。

Fはアルカイクに笑みを浮べていた。

増岡「……」

Fは、小型DVカムを顔の前に構え、LEDライトを点灯させて、増岡の顔にレンズを向けた。

増岡「——」

○V／ヴェウファに映る増岡の顔

レンズを見つめている増岡、次第に——、その表情が変わっていく。

喉を押し潰した呼吸に鳴り——、笛の様な吐息——

Fのそれと交わって——、増岡の表情は、真なる恐怖を感じたそれになっていく。

「稀人」完